落語

演目・用語事典

稲田和浩 編

日外アソシエーツ

目次

解説　1
この事典の使い方　3
落語の歴史　6
落語を聞くにはどうすればいいか　22
演目事典　27
落語・寄席用語　127
用語事典　137
キーワード索引　367

紙切り　林家正楽
寄席文字　橘右楽

凡例

1. 本書の内容

本書は、演目（落語のタイトル）から落語を調べる演目事典、落語に関連する言葉を調べる用語事典、演目がわからない際に思いついた言葉から落語が引けるキーワード索引から構成されている。

2. 解説

「この事典の使い方」、「落語の歴史」（落語の起原はいつ頃？、落語のはじまり、落語と近代など）、「落語を聞くにはどうすればいいか」（寄席のすすめ、ホール落語の楽しみ、地域寄席に行ってみよう、テレビ、ラジオ、CD、ネット配信）の三項目にわけ解説を行っている。

3. 演目事典

東京の古典落語を中心に、新作落語（昭和～平成の始めに作られた作品より編者が選択）、上方落語の一部、計六百三十三席を収録した。

演目を見出しに、別名、噺の長短、梗概、解説、主な登場人物、フレーズ（名文句）、キーワードを掲載した。

（例）

おおやままいり【大山詣り】（別）百人坊主（ひゃくにんぼうず）

〔長短〕長

〔梗概〕大山参詣に行く一行、腹を立てたり喧嘩をしてはいけない、という約束で行くが、案の定、乱暴ものの熊五郎が酔って暴れた。〔解説〕六月二十七～七月十七日は相模の大山が解禁になる。大山参詣は江戸っ子たちの楽しみの行事の一つだった。〈登〉熊五郎（くまごろう）、参詣の一行、先達さん（せんだっつぁん）、一行の女房たち、宿屋の女中〈フ〉腹を立てたら一分の罰金、手をあげたら、その野郎を坊主にする。お坊さんが寝ている。亡者が迷って来たよ。〈キ〉大山、女房、坊主

4. 落語・寄席用語

落語界や寄席で使われている符丁（カゼ、やかんなど）や、落語の分類（滑稽話、三題噺など）、各協会（落語協会、上方落語協会など）についてなど百十六語を解説した。

5. 用語事典

落語や背景となった時代、文化、生活などに関する言葉、表現、慣用句と関連する地名、人名、職業など三千二百七十八語の解説とその言葉に関連する演目を掲載した。

（例）

◇へっつい

（用語）竈。基本的に住居に備え付け。米を炊いたり、鍋を置いて味噌汁も温めた。（演）「品川心中」「だくだく」「不動坊」「へっつい盗人」「へっつい幽霊」

6. キーワード索引

落語の演目がわからない場合に、登場人物や描写など千三十八語のキーワードとそのキーワードから連想される演目と演目事典の掲載ページを表示した。

（例）

鰻屋　→鋳掛屋　42
　　→鰻の幇間　47

7. 編者より

落語は流派、演者によって、ストーリーの内容、登場人物の名前、サゲ（落ち）などが異なる場合があります。それぞれの演者の工夫が活きてこその落語なのです。古典落語と言いますが、古典落語という言い方は評論家がつけた便宜上の名称で、能・狂言や浄瑠璃などの古典芸能のように、決まった形でなければいけないものではありません。もちろん、流派の形などは継承されてゆくものですが、それ以上に時代の変化、客席の好みなどにより変わってゆくのも落語です。

ですから、ここで書かれている梗概、登場人物名、フレーズなどは、一般的に使われているもので、決められたものではないことをおことわりしておきます。

たとえば、「お神酒徳利」のストーリーは、主人公が刈豆屋の番頭で、最後は鴻池のお嬢様の病を治しますが、柳家で演じられているものは、主人公は八百屋で、神奈川宿で出奔して終わります。

「死神」は三遊亭圓朝の作で、一般に演じられているのは圓朝の物語を継承していますが、初代三遊亭圓遊が改作した幇間を主人公にしたものも演じられていました。もともとの「死神」も死神退散の呪文などは演者それぞれが工夫をして演じています。また、サゲも六代目三遊亭圓生は主人公が死んでばったり倒れる仕草落ちですが、柳家小三治はくしゃみで蝋燭の火を吹き消してしまう。他にもさまざまな演出で聞かせています。

わりと有名な落語で「芝浜」があります。主人公の名前は、勝五郎だったり、熊五郎だったり、とくに名前がなかったり、いろいろです。

与太郎噺でおなじみの「金明竹」や「かぼちゃ屋」も、五代目柳家小さんは与太郎でなく松公という名前にしていました。小さんの知り合いで与太郎みたいな松公という人がいたんだそうです。小さん門下でも、与太郎でやる人と松公でやる人がいます。

「寿限無」の名前、「金明竹」の道具七品も流派によって微妙に違ったりします。

ここで書かれている梗概、登場人物、フレーズはひとつの例ということでお考えください。

この事典の使い方

一　落語事典とは？

落語を聞いて、より詳しい内容や、その落語の背景、系譜などを知りたい人のための落語事典があります。草分け的な存在は、昭和四十四年刊行、東大落語会が編集した「落語事典」（青蛙房）です。五代目古今亭志ん生、八代目桂文楽、六代目三遊亭圓生ら昭和の名人たちが活躍していた時代に、東京大学の落語研究会の有志が編さんしたもので、落語好きの英知の集団による信頼性のおける一冊です。いまでも、この「落語事典」はおおいに活用されています。

しかし、この「落語事典」が編まれてから半世紀以上の月日が過ぎました。当時でも、古い速記本から興した、もう演じられていないネタもたくさん収録されていました。いま、東大版「落語事典」に載っている落語で、まったく上演されていない落語がどれだけあるか。もちろん研究の手掛かり足掛かりには必要な本ですが、日常的にちょっと落語を知りたいくらいの時には、少しずつ使い勝手も悪くなってきているところもあります。

東大版「落語事典」から十三年後の昭和五十七年、東大版の編者の一人、保田武宏氏（当時・読売新聞文化部記者／現・演芸評論家）の編による「ライブラリー落語事典」（弘文出版）が刊行されました。これは速記本やレコード・テープに収録されている落語を集めたものです。これは使いやすい一冊です。何せ、調べて、聞きたい、もっと詳しく内容が知りたいと思えば、速記本やレコード・テープで読んだり聞いたりも出来ます。昭和五十七年だから、まだＣＤじゃないんですね。ただ、保田版「落語事典」は「東京編」としてあり、東京の古典落語（古典化している新作落語数席を含む）に限定、また、前座噺などで速記化、レコード・テープ化されていないネタは載っていない、という欠点もあります。それでも、事典として落語を調べるには十分な一冊で、実は私も一番手軽にもちいているのは、保田版「落語事典」です。

その後も今日まで、何冊か「落語事典」や「落語事典のようなもの」が刊行されています。新作落語にも触れられているものもあります。古典落語を二百席か三百席くらいに限定して、より詳しい解説を述べているものや、それこそ文庫や新書サイズでコンパクトにしているものもありま

す。中には、「間違い探し」かと思うようなものまであったりしますが、まぁ、ご愛嬌でいいでしょう。

東大版から半世紀、保田版からも四十年が経った今日、現代の人が使って、使い勝手のいい「落語事典」が作れないだろうか、と思いました。

では現代の人に使い勝手のいい「落語事典」ってなんだ。数を網羅するというのはあるでしょう。たとえば、いまは演じられていなくても、速記本やレコードなどに残っている落語はたくさんあります。どこまでを網羅するのか。新作落語はどうする、上方落語はどうするんだ。考えることは山とありました。

二　この事典の使い方

この事典の使い方は大きく三つあります。

①落語のタイトルから落語を調べる。
②タイトルのわからない落語を調べる。
③落語に出て来る、ちょっとわかり難い言葉を調べる。

①に関しては、従来の東大版、保田版などと同じ目的です。

②に関して。これが新しい、かな。寄席に行くと、いろんな落語が演じられています（寄席に関しては、別の章で詳しく記す）。ホール落語や、個人の独演会などでは、演目が発表されているのが普通です。また、発表されていない会ですと、最近の落語会では終演後ロビーに演目が張り出され、お客様は携帯で写真を撮ってから帰る、なんていう光景をよく見かけます。

対して寄席は、落語の演目は一切発表しません。今日聞いた落語の詳細が知りたい、と思っても、調べる術がありません。まぁ、だいたい落語のタイトルは、子供を褒めるから「子ほめ」、小言を言う幸兵衛さんが出て来るから「小言幸兵衛」、与太郎がかぼちゃ屋をやるから「かぼちゃ屋」とわかりやすいですが、中には「金明竹」「棒鱈」「宮戸川」など、タイトルと内容が結びつき難いものもあります。

この事典では、キーワードから落語を引けるように考えました。

たとえば「与太郎が出てきた」、与太郎のキーワードで引くと、「牛ほめ」「かぼちゃ屋」などの落語が導き出される、というわけです。

ネットで検索すればいいだけかもしれませんが、ちょっと試みてみました。

③に関して、落語には結構古い言葉、いまは使わない言葉、いまはない職業、地名なんかも出て来ます。歴史上の

【あ】

あいあいがさ【相合傘】（別）雨のち晴れ（あめのちはれ）〔長短〕短

〔梗概〕サラリーマンが駅を降りたところで雨に降られ、知らない美女と相合傘。いろんな妄想が頭をよぎる。〔解説〕七十年代の新作落語。古城一兵（作）、桂米丸（口演）。米丸の孫弟子、桂枝太郎はサラリーマンを学生に置換えて「雨のち晴れ」として改作。〈登〉サラリーマン、美女〈キ〉雨、傘、サラリーマン

あおな【青菜】〔長短〕中

〔梗概〕植木屋が屋敷の主人から酒肴（しゅこう）をご馳走になる。屋敷で使用されていた隠し言葉をカッコいいと思った植木屋は、長屋で女房に真似をさせようとして失敗する。〔解説〕夏の午後のお屋敷と長屋生活が描かれる。夫婦の機微も伝わる。夏の滑稽噺の代表。〈登〉植木屋、植木屋の友達／大工、植木屋の女房、屋敷の奥様、屋敷の主人〈フ〉上方の友人からいただいた、やなぎがけ。植木屋さん菜をおあがりか。鞍馬山から牛若丸が出まして。当たり前の酒。〈キ〉植木屋、夏、夫婦、やなぎかげ

あくびしなん【あくび指南】（別）あくびの稽古（上方）（あくびのけいこ）〔長短〕短

〔梗概〕町内にあくび指南所が出来た。物見高い江戸っ子は早速あくびを習いに行く。〔解説〕あくびを稽古するという、江戸ののんびりした味わいも魅力的な一席。寄席で演じられている。〈登〉あくびの先生、男、男の友達〈フ〉おい船頭さん。退屈で退屈で。〈キ〉あくび、船、吉原（なか）

あけがらす【明烏】〔長短〕中

〔梗概〕堅物（かたぶつ）の若旦那、時次郎を町内の札付（ふだつき）二人が吉原に連れて行く。狼狽した時次郎だが、遊女、浦里と出会い一夜を過ごす。〔解説〕若者の童貞喪失譚。新内「明烏夢泡雪」（あけがらすゆめのあわゆき）より登場人物の名前を借りた。八代目桂文楽の十八番で、演じる落語家も多い。吉原の描写が詳しく、遊びの翌朝の景色も描かれる。甘納豆の場面などの見せ場もある。〈登〉浦里（うらさと）、源兵衛（げんべえ）、多助（たすけ）、時次郎（ときじろう）、時次郎の父、時次郎の母、吉原の人たち〈フ〉お稲荷さんのお箒り。町内の札付。稲本、角海老、品川楼、大店でございます。女郎買うと瘡かく。結構なお箒りでした。〈キ〉浦里・時次郎、初午、吉原

あさのれん【麻のれん】（別）按摩の蚊帳（あんまのかや）〔長短〕短

〔梗概〕盲人の按摩が旦那の家に泊まった時の盲人ゆえの失敗譚。〔解説〕笑いのうちに盲人の哀しみが描かれる。〈登〉按摩、女中、旦那〈キ〉按摩、蚊帳、夏

あしあがり【足あがり】（別）番頭足上がり（ばんとうあしあがり）〔長短〕中

〔梗概〕船場（せんば）の商家の番頭が、店の金をごまかし、歌舞伎を見て豪遊していたが、供に連れて行った芝居好きの定吉から旦那に知られてしまう。〔解説〕船場を舞台にした上方落語。「足があがる」とは「解雇される」という意味。〈登〉芸妓、定吉（さだきち）、旦那、番頭、奉公人たち〈フ〉ホントついてます。筆の先から金が出る。この先をお前に見せたかった。〈キ〉船場、東海道四谷怪談（とうかいどうよつやかいだん）、番頭

あたごやま【愛宕山】〔長短〕長

〔梗概〕京近郊の愛宕山に遊びに行く旦那の一行。供に芸妓たちや幇間、一八と繁蔵を連れてゆく。中腹に着いた一行、旦那はかわらけ投げらに興じ、かわらけじゃつまらないと小判を投げる。小判は飛ばずに谷底へ。「拾った奴にやる」と言われ、一八は傘を持って谷底にダイブする。うまく着地したが、上がる方法はない。〔解説〕上方の噺。東京では上方に行く旦那に一八が付いて行く。〈登〉一八（いっぱち）、芸妓大勢、繁蔵（しげぞう）、旦那、茶店の婆さん〈フ〉背中を押してやれ。狼に食われて死んじまえ。狼によいしょはきかない。偉い、生涯晶屓にしてやるぞ。〈キ〉幇間、愛宕山（あたごやま）、小判

あたまやま【あたま山】〔長短〕短

〔梗概〕ケチな男がさくらんぼを種まで食べたら、頭の上から桜の木が生えてきた。〔解説〕小噺程度の噺だが、八代目林家正蔵は音曲入りで演じた。〈登〉男、女房、花見や釣りの客大勢〈フ〉あたま山の一本桜。〈キ〉けち、さくらんぼ、花見

あたみみやげいでゆのききがき【熱海土産温泉利書】〔長短〕連

〔梗概〕大久保家の臣、水口三右衛門の娘、はまは、弥三郎と恋仲になるが、三右衛門が主家を離れたため別れる。弥三郎が勘当されたと聞いたはまは心配で会いに行くが、金蔵という悪党に騙され吉原に売られる。通人の宗我に見受けされたはまは熱海で弥三郎と再会。やがて、男装したはまは金蔵を討つ。弥三郎は勘当が解け家を継ぐ。はまは弥三郎に会いに行くが二人は結ばれることはなかった。〔解説〕三遊亭圓朝（作）。柳家喬太郎が口演。〈登〉はま、みな、琴の浦（ことのうら）、近藤弥三郎（こんどうやさぶろう）、水口三右衛門（みずぐちさんえもん）、池田宗我（いけだそうが）、金蔵（きんぞう）〈キ〉仇討ち、熱海、男装

あちたりこちたり【あちたりこちたり】〔長短〕短

〔梗概〕酔っ払いが飲み歩く。タクシーを拾い「銀座へやってくれ」。運転手も心得ているから、十条銀座商店街へ。〔解説〕柳家小満ん（作）のスケッチ風新作。〈登〉男、タクシー運転手、飲み屋〈フ〉十条銀座。仮面ライダー。〈キ〉銭湯、タクシー、酔っ払い

あどばるーん【アドバルーン】（別）広告気球（こうこくききゅう）〔長短〕短

〔梗概〕失業している男が紹介されたのは、デパートの広告気球に乗る仕事だった。〔解説〕昭和初期の新作落語。有崎勉＝柳家金語楼（作）、五代目古今亭今輔（口演）。現在は上方の桂文珍も演じている。〈登〉男、デパートの男〈キ〉アドバルーン、失業、デパート

あなごでからぬけ【穴子でからぬけ】（別）からぬけ〔長短〕短

〔梗概〕与太郎が源さんに「なぞなぞをやろう」ともちかける。〔解説〕小噺。与太郎のネタのマクラで使われることが多いが、時間のない時、一席で演じられることもある。〈登〉源さん（げんさん）、与太郎（よたろう）〈フ〉今度は鳴かねえんだ。〈キ〉穴子、なぞなぞ、与太郎

あなどろ【穴泥】（別）穴庫の泥棒（あなぐらのどろぼう）、晦日の三両（みそかのさんりょう）〔長短〕中

〔梗概〕大晦日、金に困って金策に歩く男。大店の裏木戸が開いているので、ついつい中へ入ると…。〔解説〕暮れの金策の話。

（※文例）

◇兄（あに）さん　落語家が先輩（二ツ目、前座）を呼ぶ時の敬称。最近は女性落語家もいるので、女性落語家は姐さん（ねえさん）になる（中には兄さんと呼ばせる女性落語家もいる）。

◇一番太鼓　寄席の開場の時に叩く太鼓。大太鼓を用い、お客さんがたくさん来るようにとの願いを込めて、「どんどんどんと来い」と叩く。

◇一門　演芸界では師匠を軸にした弟子、孫弟子らをいう。※小さん一門。

◇一足（いっそく）　数字の隠語で「百」のこと。

◇色物　落語以外の演芸。漫才、太神楽、紙切り、音曲、奇術など。寄席の看板に赤い字で書かれるところから、色物と呼ばれる。

◇うち弟子　師匠の家に住み込みで修業する弟子。⇔通い弟子

◇江戸落語　①江戸時代の雰囲気を今日に伝える落語。古典落語。②上方落語に対して、東京の落語の意味。

◇演芸作家　落語、漫才、浪曲などの新作台本を書く作家。演芸に詳しい放送作家などで落語家などのブレインとして活動している人もいる。日本脚本家連盟で演芸をカテゴライズしている作家だけで五十人くらいはいるが、連盟に所属していない作家も多い。関西の小佐田定雄、くまざわあかね、東京の本田久作は落語作家を名乗っている。

◇圓朝忌　三遊亭圓朝の命日（八月十一日）に谷中・全生庵で行われる法要およびイベント。

◇圓朝ネタ　三遊亭圓朝作品、および圓朝・作といわれている落語。「牡丹灯籠」「真景累ヶ淵」「塩原多助一代記」など人情噺の他、「死神」「鰍沢」「にゅう」などの一席の落語もある。「芝浜」「お若伊之助」などは圓朝・作といわれている。

◇追い出し　寄席が終演の時に叩く太鼓。大太鼓で「デテケデテケ」と叩く。鈴本演芸場では終演の時に木戸にて、追い出し太鼓の実演を見ることが出来る。

◇大喜利　トリの口演のあと、落語家らが余興や踊りなどを見せる観客サービス。現在では、住吉踊りや高座舞、噺家バンドの「にゅうおいらんず」の演奏などが行われている。噺家が大勢並んで、なぞかけやお題噺をするのもそういった余興の一つ。人気テレビ番組「笑点」の大喜利もその一つである。

◇落ち　サゲのこと。

◇お茶子　寄席の女性従業員。上方落語では高座返しもお茶子の仕事。

◇音曲噺　噺の中に音曲が入る落語。「豊竹屋」「後家殺し」「稽古屋」「ガーコン」など。

◇怪談噺　幽霊や怪異譚を扱った落語。昔はクライマックスで前座が幽霊になって客席に出て来ることもあった。「牡丹燈籠」「真景累ヶ淵」などがある。

◇カゼ　扇子のこと。最近の楽屋ではあまり言わないらしい。

◇カタゴ　数字の隠語で「五」のこと。

◇片しゃぎり　演者の登場、退場などの時、出囃子を用いずメ太鼓のみの時の太鼓の打ち方。

◇上方落語　関西の落語。上方ことばで演じられる。天和・貞享の頃（一六八〇年代）、京と大坂で行われていた辻噺がはじまり。落語のスタイルは東京とほぼ同じだが、上方ならではの演題も豊富にある。また、「はめもの」といって噺の途中で鳴物が入るネタも多い。

◇上方落語協会　上方落語家の団体。昭和三十二年発足。平成十六年社団法人となり、平成二十三年より公益社団法人に移行。現在は約二二〇名以上の会員がいる。

◇紙切り　寄席の色物芸の一つ。一筆描きの要領で白い紙の形を切り抜き、季節の風物や動物などのシルエットを見せる。

◇カミシモ　落語の演技術。人物を演じ分けるために、偉い人や在宅者が上手にいるという設定で、下手（右に向って）に話し掛ける。目下や来訪者は上手（左に向って）に話しかける。歌舞伎の舞台で通常、花道のある方が下手になる。来訪者は下手から来るものなのである。

◇上席・中席・下席　寄席のプログラムは原則として十日ごとに番組が組まれている。一～十日が上席、十一日～二十日が中席、二十一日～三十日が下席と呼ばれている。

◇木戸　寄席の出入口。

◇木戸銭　寄席の入場料。

◇キン　①お客さんのこと。お金を持って来るから。※今日は甘キンだね（よく笑うお客だね、という意味）。②バカのこと。蔑視の意味でも使うが、むしろ「天然」みたいな、芸人的には「素質がある」というような意味にも用いる。※あいつはキンだから、からかうと面白い。

◇食いつき　寄席で中入りの後すぐの出番。お客さんはお弁当やお菓子をまだ食べている時間なので、じっくり聴かせる落語は不向きなところから、色物か若手が出ることが多い。

◇下座さん　出囃子や曲芸、奇術、紙切りなどのＢＧＭを弾く三味線のお姉さん。

◇下足　靴や草履など履物のこと。

◇見台　上方落語で用いる小机。場面転換などの演出に効果的である。

◇高座　寄席の舞台のこと。

◇高座返し　落語家の出番の入れ替わりに、前座が高座の座布団をひっくり返すこと。

◇講談ネタ（釈ネタ）　講談のネタを落語として演じているもの。「井戸の茶碗」「柳田格之進」「小間物屋政談」など。

◇五代目圓楽一門　落語家の団体。昭和五十三年六代目三遊亭圓生が落語協会を脱退し、三遊協会を設立するが翌年圓生没で解散。一門は落語協会に復帰したが、五代目三遊亭圓楽とその一門は別団体として活動し今日に至る。大日本すみれ落語会、落語ベアーズ、圓楽党、圓楽一門を経て、平成二十一年五代目圓楽没後は、五代目圓楽一門として活動している。

【あ】

◇あいかた【敵娼】
（用語）客の相手（遊女）。（演）「居残り佐平次」「お茶汲み」「五人廻し」「三枚起請」「千早振る」

◇あいくち【七首】
（用語）長さ九寸五分の鍔のない短刀。（演）「新聞記事」

◇あいすくりーむ【アイスクリーム】
（用語）牛乳、砂糖、卵黄を混ぜ冷凍させた菓子。（演）「かんしゃく」「強情灸」

◇あいぞめがわ【藍染川】
（地名）現在の小平を水源とする石神井川の下流。現在の谷中の蛇道が藍染川になる。（演）「牡丹燈籠」「三井の大黒」

◇あいたいげんか【相談喧嘩】
（用語）偽装喧嘩。（演）「胴乱の幸助」

◇あいたいまおとこ【相対間男】
（用語）美人局のこと。

◇あいちゅう【相中】
（用語）役者の階級。下級役者。（演）「中村仲蔵」「淀五郎」

◇あいちゅうかみぶん【相中上分】
（用語）役者の階級。下級役者の中でも、名題昇進に近い者。（演）「中村仲蔵」「淀五郎」

◇あいみじん【藍微塵】
（用語）縦横二本ずつ、藍染糸の濃淡で描く格子縞。（演）「しじみ売り」

◇あうんのこきゅう【阿吽の呼吸】
（用語）二人以上で何かをする時に、気持ちがピッタリ一緒になること。（演）「柳の馬場」

◇あえもの【和えもの】
（用語）野菜、魚などを、酢、味噌、胡麻、辛子などで和えて作った料理。（演）「本膳」

◇あおぎなこ【青黄粉】
（用語）黄粉に青粉を混ぜたもの。（演）「茶の湯」

◇あおざしごかんもん【青差五貫文】
（用語）青銅の一文銭千枚を差しに通したものが一貫文。それが五つで、親孝行などの褒美にくだされた。現在の価値で約十二、三万くらい。（演）「孝行糖」

◇あおものよこちょう【青物横丁】
（地名）品川区の地名。昔、青物市場があった。（演）「居残り佐平次」

◇あおやまてっさん【青山鉄山】
（人名）「皿屋敷」の登場人物。お菊を惨殺し、祟られる。（演）「皿屋敷」

◇あかいごもんのかみ【赤井御門守】
（人名）落語の登場人物で大名の名前。門が赤いということで、前田侯がモデル。（演）「ねぎまの殿様」「妾馬」

◇あかいぬのしっぽ【赤犬の尻尾】
（洒落）尾も白くない、面白くない洒落。（演）「締め込み」

◇あかししがのすけ【明石志賀之助】
（人名）江戸初期の力士。生没不詳。下野出身で、初代横綱。四十八手を考案したと言われている。（演）「阿武松」

◇あかっぱじ【赤っ恥】
（用語）赤面するような酷い恥。（演）「包丁」

◇あかどうふ【赤豆腐】
（用語）寺の隠語。鮪の刺身のこと。（演）「こんにゃく問答」

◇あかにしや【赤螺屋】
（用語）赤螺は吝嗇な人への蔑称。落語でケチな店の屋号として登場。（演）「片棒」

◇あかばね【赤羽】
（地名）東京都北区の地名。日本のビバリーヒルズと呼ばれている。（演）「野ざらし」

◇あかはぶたい【赤羽二重】
（洒落）日に焼けた黒羽二重をいう洒落。（演）「夢金」

◇あかべろべろのしょうゆづけ【赤べろべろの醤油漬け】
（用語）鮪の刺身のこと。（演）「棒鱈」

◇あかまじんぐう【赤間神宮】
（地名）下関の神社。壇ノ浦の戦いで死んだ安徳天皇が祀られている。（演）「源平」

◇あきご【秋蚕】
（用語）七月中旬に孵化した蚕。（演）「妾馬」

◇あきす【空き巣】
（用語）人のいない家を狙う泥棒。（演）「締め込み」「出来心」

◇あきだな【空店】
（用語）長屋の空き家。（演）「お化け長屋」「小言幸兵衛」「搗屋幸兵衛」「旅の里扶持」

◇あきだわら【空俵】
（用語）空いた俵。（演）「ねずみ穴」

◇あきめくら【あき盲】
（用語）わかっているようで、何もわかっていないこと。（演）「子別れ」

◇あく【灰汁】
（用語）肉や野菜を煮た時に出るたんぱく質などの固まり。（演）「寝床」

◇あくえん【悪縁】
（用語）よくない縁。（演）「おさん茂兵衛」

◇あくしちろうびょうえかげきよ【悪七郎兵衛景清】
（人名）鎌倉初期の武士。?～一一九六。平家方の猛将で、歌舞伎や浄瑠璃の題材となっている。（演）「景清」

◇あくせんみにつかず【悪銭身につかず】
（諺）盗んだり、博打で勝ったりした金はすぐになくなってしまうという意味。（演）「へっつい幽霊」

◇あくまげどう【悪魔外道】

キーワード索引

【あ】

アイスクリーム →かんしゃく 58
逢引 →長持 95
青差し五貫文 →孝行糖 65
赤ん坊 →安産 42
→お七 50
→後生鰻 67
→子ほめ 68
→寿限無 78
空店 →小言幸兵衛 67
あくび →あくび指南 39
浅草 →浮世根問 46
浅草奥山 →高田馬場 84
浅草並木 →江戸の夢 48
足抜け →雪の瀬川 119
吾妻橋 →文七元結 108
→星野屋 110
仇討ち →熱海土産温泉利書 40
→粟田口 41
→操競女学校 113
→宿屋の仇討ち 117
愛宕山 →愛宕山 40
仇名 →猫久 99
熱海 →熱海土産温泉利書 40
アドバルーン →アドバルーン 40
穴 →穴泥 40
穴子 →穴子でからぬけ 40
姉 →松曳き 112
姉川の戦い →浮世床 46
→毛氈芝居 116
アパート →扇風機 82
油虫 →雨の将棋 41
尼 →新聞記事 80
尼寺 →七度狐 74
雨宿り →雨夜の引き窓 41
阿弥陀様 →狸の化け寺 86
阿弥陀堂 →西行 70
雨 →相合傘 39
→雨の将棋 41
→笠碁 55
→道灌 92
→日和違い 105
飴屋 →孝行糖 65
嵐 →九州吹き戻し 61
荒物屋 →江戸荒物 48
淡島大明神 →夢の酒 120
あんころもち →喜撰小僧 60
安珍・清姫 →大師の杵 83
安中 →安中草三 42
按摩 →麻のれん 39
→あんま 42
→按摩の炬燵 42
→三味線栗毛 77
→年枝の怪談 100
→柳の馬場 118

【い】

いか →てれすこ 91
いが栗頭 →いが栗 42
笊 →せむし茶屋 81
鋳掛屋 →鋳掛屋 42
イカモノ →江島屋騒動 48
生き胆 →肝つぶし 60
行き倒れ →粗忽長屋 82
池田 →池田の猪買い 43

編者略歴

稲田 和浩（いなだ・かずひろ）

東京都品川区出身。日本大学芸術学部演劇学科卒業。86年頃より、浪曲の台本を書き始め、その後、落語、講談などの台本、邦楽の作詞などを手掛けるようになる。現在、協同組合日本脚本家連盟演芸部副部長、文京学院大学外国語学部非常勤講師（芸術学）。
演芸台本のほか、小説、浅草喜劇の脚本、演出も手掛ける。主な著書に「女の厄払い」（祥伝社, 2019）、「江戸落語で知る四季のご馳走」（平凡社, 2019）、「大人の落語評論」（彩流社, 2014）他がある。

落語 演目・用語事典

2021年1月25日　第1刷発行

編　　者／稲田和浩
発 行 者／山下浩
発　　行／日外アソシエーツ株式会社
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス
電話 (03)3763-5241（代表） FAX(03)3764-0845
URL https://www.nichigai.co.jp/

印刷・製本／株式会社平河工業社

©Kazuhiro INADA 2021
不許複製・禁無断転載
<落丁・乱丁本はお取り替えいたします>

《中性紙三菱クリームエレガ使用》

ISBN978-4-8169-2861-1　*Printed in Japan,2021*